特54
46

倭錦 四合原氏

拾七編

光氏つくづく思ふやう世をもをさめん姫ゐるをかくうづもれてすたゆくゝ是非なき事ゆゑあんゐをとゑきりに哀をもよほして人ゑれゐ袖をぬらしたまのあふせと（あやなぎ）ゆゑめづらしくものゆたるも只うれなりゐ開なゆしき春といへとまだゐゆき夜すゆらなげきゐたりけり。うらうじて夜も明ぬるけしきゐをむおきいでつ手づゐら雨戸をおしあけて庭の雪を見わたすゐふをあけたるゐとも名ゝもるゝとゐれゐたりいとさびしげゐるゐりさまゐて夜いまだまつたくゐけやらぬ月のくらけれと降積々雪のひゝりゐいとゐをきよらゐゐ見ゆる光氏ゆすゆたを障子のすきまよりゐの古くよりつゐへたる老人どもいさしのゆきをのうき事もわををてうちゐをつゝ詠めゐたり此時ゐ（あやゐを）いおんてうづの湯をもて参り「今むねきよゆゐ寝間よりアレ〳〵あれへトをしゆをゝ光氏も身をおこしゐゐたの一ト間をうゐゝふに（むねきよ）いゐくとも去らず今い本意をとげたりとよろこゝしきゐりさまゐて えんのむしまでたらいでつ「あらおもしろの雪景色此さゝろへるも心ゐし姫もろともゐゝへ來てをうしき空をも見たまへやとひと夜ゐもせよろひふしたる中ゐ心のへだていあらじト暗ゐてゐひたるてさぐりの心えゆたき事ゐをゝ見ゐらむさんとやおもひけん恨を顔ゐいひけれゝ寝家の屏風を（くれゐい）ゆおしたゝんで姫君さまむやゝ〳〵あれへいでさせたまへ太い心美〳〵人の嬢へきてゆる事いゐびたまむぬものとやらむづかしとおぼしめをもをりにゐろよれ山名の殿ゆまつておいでゐろゝをゝとめられて稲舟い小袖のえもんひきつくろひいざりいづれゝ（むねきよ）いろとのゐたをうち詠むるふぜいゐもてゐしたゝならぬ去りめづゐひゐゝく見れゝまづゐだけたのうしてせのなゆき事たとへゆたし手さぐりのゐやしかりしゆされゝよとむねふさゆりふとめのとまるゐゐれゐついでかたわと見ゆるい鼻ゐりけりふげん菩薩の乘たまふ大白象の鼻のいろいゐかき蓮華の如くゐりと佛經ゐ見えたるものくやと思ふをりゐてゐさましきまでたのやゐゐてさきのかたすてしたをいろづきたるいゐをわをし柘榴の實ゐよく似たりおもてのいろいふりつもる雪づかじきさまなゆらゐまりに白くてゐをををふくを領大きくえれたるゐろをゐもまさりて去たいふくらをゐろろしきまでおもゐゆゐり姿ゐたちいやせさらぼひ小袖の上よりゐたの骨いいた〳〵しげにゐらむをていと肥ふげゐるふぜいゐれを（むねきよ）いゐきをゐゐきれ何のためゐゐのてりなく見ゐらむしけんくちをしさよふもすゆらのさふめ事も今とゐりていむねゐろきてふちいゐゐゆらめづらしきゐりさゆゐるゐゐをつくづくのをのゐふりをうち見れゝよゐめでらるゝ女ゐもおとるまじくをどりゐるをふさやかゐ結ゐゆたりきたまへるものをさへいひたつるいものいひのさゆゐきやうゐきこゆをどもすべてむゐしのものゆたりゐまづ人の去やうゐくを去るしとゝむるゐらひゐをゝ其さまをゐら〳〵いむんゐくをなゐのゐやゐやゐらん非のいろさめてきゝをたるゆゐをとしふりて去らをたるゐうちゐさねしいむらさきのゐをもいくとしへしやらん黒きいろともまゆへるを去とけなげゐゐいとりたり又其上ゐ虎の皮のぞう着といへるものをきゐしつげゐゐの皮いきよらゐゐてゐうむしきまで美しけれむ太刀の去り鞘敷革ゐいつくりて人のもてむやせどまだわゐやゐゐる姫君の裝ひゐいいとにげなしさをとも此皮ゐゐりせゝさむげに見ゆる顔ゝせを心ぐるしく見るからに（むねきよ）とゐうのことむなく去ゝしゆはどいむうぜんと彳てゐたりしゆ今さらすてゝもおきゆたくゐたむらゐおしなをりものいひゐけてゐゝろ見れむ只いたうむぢらひつ袖をもて口元をおはひゐくすも古めゐしくゐの浮世又平ゆかきたる屏風の女畜ゐたましゐいりてたちいでなたりくもゐらんと思ひゐむせかさねてかよむん心もうせむて口ゐまのせてされ事をさまづ〳〵にいひゐくをゝさす

が打笑たまへるけしきいとしたみく姫君と人のうやまひうしづける人がらわい似合しからず室町どのにてすておかるゝもことわりなりと（むねきよ）い心のうちわ興をさましいろぎてろてをたちいでけるが霞わうでをうきいきさせし門いまだあけざりければ鍵預りのものやわると（むねきよ）が家來どもろてらをたづねめぐりけれど雪をおもげわつをゝして今やたをれんとする小家ありおいさらぼひて海老の如く腰うゝまりたる一人りの男顔もむだへもすゝけたるがさむしとおもへるけしきふうく箱めきてわやしきものわ火をはのゝにいれたるを袖ぐゝをにもちアラつめたやと足をつまだて去ぶ〳〵にいで來たり門の番いわをわて候いでわけにまゐらせんといひつゝ鍵いとりいだせど手いうゝまり目いうとく錠のあうぬにきをいらち娘が家わありけるうちいうやうのときい力ともたすけともありたるが去年より姫ぎとのおろをづのひに召よられ世わいふわりがためいわくというゝる事にや

あらんゐんど一人りおとにうちつぶやきとてしゐきありさよなるを山名のとも人もとのしがりたちよりて門ひきあけうきいだす乘物の簾をわげて（むねきよ）も何心なく門番の翁の顔をうち見るに其鼻いとあかゝりけれたさむしと見えつる稲舟のおもうげをふとおもひいだしうちはゝ笑つゝこのへりけり。紅ゐゐたへとしし來たり「今むねきよが姫君のおん顔ばせをとじめて見やりつねもまろくて大きゐ目をなを見えりたる其をかしさやう〳〵こちへてをりまして袖を口わおしあてゝ笑ひゐろびつ光氏にやうすをのたればつとざをたち「已れもふすまのうげよりして去どうの事どもよくきけりまづ稲舟わ對面せんトふすまおしあけうしてにいり（むねきよ）どのとにひまくらいうゐる事をかたりしう聞うせたまへトよりろへと姫い顔をうちわうめとのうのへんじもなきとところへ屏風のうげより杉生い（さゆり）をいざなひたづうにたちいで「二度ある事い三度目わ又已かきとのおむねのうちうけたまとりに參りましたおんものおもひのおまぎれに）あやなた）をゐゝにすゐおきうよひたまふいきとえゐがら其（あやゐぎ）に姫君のお返事を去たゝめさせ山名三郎むねきよを此おやのたへ招きよせゐゐたさへ大切におぼしめしておんろひふしをあろたさぬ稲船樣にあとせたまふといふ事をみきゐる（さゆり）がいつものとふり去らせを聞て霞よりゐき」へわがりまして何うの樣子いうけたまとつてをりましたおよういふういあゐたの事よもやまてとの姫君でいあのものいおざりますまい何とゆまゐとの稲船樣のおんありうをうなたまとり「ヲ、わんと去たいといふのでわらふ（あやゐぎさゆり）其外のゐしもとどもゝうゐらずとも此事人わもらすなト口がためしつ（くれゐい）がを手をとつて上座へゐをしとやくも世をさりたまひたる義勝公のおん嫡女稲船姫わお目見えいたせト聞て杉生ゐじめとしありわふ人〳〵うち驚き「さやうゐら只今まで（くきゐゐ）どのとゐうべいのわしらいふしたあゐたがま

あとの「ウ、其譯をのたつて聞せん杉生わいさいつゐろも云んぷくをつげつる如く男子あらた世をとるべき血筋わておりゐゞら此とゐろゐうづもをてたのもしき人なきありさまを見るわたへかね人目をつゝみろをゞしいうとのらずとひよりしゞ宗全ゞ事よりしておもひすてゝいやをゞたき事のみいよ〳〵いできたれり其云さいいゝの（むねきよ）つねわうのゝひくるありさまゐれわゐゞちに稲船わ心をのくるゐのりわあらずすきをうゝひうゐいかくし此姫をもりたてるさまにもてゐし謀反を企て主わゐむかふむだうものと世わろ云る人口をのついふやぎこのつい又人じちとするけいさくと思ひゐかりてふるくよりてゝわつかへて姫の面体見云りたる女べらいゐとし〳〵くまへをとをざけろゐづこのへの女どもをあらたにてゝへまゐらせよと杉生わいひつけつゐや稲船のとしのほどいたちまちゐまちもすきたれともゐをゐこのやのわ見ゆるをさいゐひまだをさなげなるゐしもとの姿わやつさやろれゞとういうちとのものわつゝみおきさて姫君の代りにいたれをのせんとゐんぜしゞ世のつねの女わてい（むねきよ）ゞぬをいだし其後せんぎもむづゝしと云ゐんをめぐらしあの如くゝたゐわちのき女を見いだしかしづかせておきたるゞ思ふにたゞゐずゐげ〳〵に（むねきよ）ふみをおくりしのべひきいれてゐゐせしに人〳〵も見し如く興さめ顔わかへりし樣子おもひたえんいひつぢやうゐりたとへれんぼの事いさしおきこの人じちのため山名のやかたへ盗をゆくともあの女い顔のをのしきのをゐらず心も愚鈍の生れつきゐにをとひても云やうとゐくもてわぐをてかへすゐちんかへそ〳〵も此ゐとい ふかくのくしてゐゝにつらなる其余の者わいさたするなトとき諭したまひけをゐ杉生わつてとうち笑ひ「くをなゐどのを姫君というけたまゐりしゞゐじめてゐをと其やうゐ事でわらうとおゆかたいをいりやうしおたづねもうしていよ〳〵わんどゐてまた今まで姫君わゐつてゐたわの女子い「アリャ（むねきよ）ゞかへるとき鍵をもつてわけにでた門番の親父の娘云のし年ゞ若すぎれべ孫りも云らぬゞゐんわせよ去年までわの小家わひとつわすんでゐた女鼻のさきゞわのいとてたれ言となく（くれゐゐ）とわだゐわよんだを稲舟の名わしてゐれのら姫ぎみわ手前いゐつてゐるのちやといひきゝせたらよろゐんでぎやうぎりくつてゐるをかしさ志ゝ心いずんと正直おをゞ兼精をゐしたとてゝまへたちゞわゐどつてゐれをわゐうわしていゐらぬ今までよりも大切わつかへてゐるゞ家のためゐじめてわをゞ稲舟の姿わりくつた其時ゝらずゐぶん顔いのくしてゐろといひつけていおいたれと朝夕ろべにゐる（さゆり）見ぬ事もゐるまいゞ去年の秋清水で姫のきりやういどのやうぢやとおれゞとふた其時わたねふくべわ目鼻とやらとるべきうたなさをありさまとわゝらさまにもみたへゞたくかいひろみておゐすれべおん顔かたちいよくも云らずといひまたらしてゐるをゝしさ山名をゐゐる其わまりゞおもひ

げけゐき人へゝまり心ぐるしくわりつらんトいひつゝ光氏あたりを見まこし之きもゐきなげものげたりまへよりつゐのへし老人ゐ見つけられていせんかたゐし又〳〵せきをわらためて稲舟どのいゐしもと(くれゐゐ)門番の(くれゐゐ)いもとの如くゐ稲舟姫ト云とねのうへゐおしゐをせと恩ゐる身のわさましさまでもちらふけしきもゐくきやうゝくひきよせつらづえつき扇を手だまゐうちゝへしよねんもなげゐ遊びゐたり光氏いちゝくより「ゐゝのやゝたへゝれげしげゝようと人ゐ志らするためをりをりいゝうちよりもふををおくりてゐとづれよたらもぬ筆も又興あり(あやゐぎ)ゝゐらずをしゆるゐトのたまへで(あやゐ氏)げこちゆきぶりを光氏ゐひきゝけてまゐらせながら「いつでや(さゆり)げもて参りし姫君のおんふみも御代筆ゐいたしませずお一人りでおきたゝめ「ヲヽさもわらんこゝ〳〵しくうへしたをきつとろろへ男めきてゝきたるゐ鍵預りのゐの親父げ手本を姫ゐ習ひつらんも(むねきよ)げまた來たらぺひた〳〵とうちとけずゐをゆるしゐきけしきゐもてゐしつらしなと男ゐゝこたせきをもたするげ戀のひじてゝゝろ之たるゝ稲舟トとゝうきこ之たまへども例の志ゝまゐものいゝねぺをゝ志うもゐゝれゐもうち見やりつゝ光氏げ(さすや朝日軒のつらゝいとけゐげら)トうちとけざりし心をこめくちずさみたまひけれぺ只ゝ〳〵と笑ふのみ口おもげなるふぜいゐれぺ其儘ゐそておき(〳〵(くれゐゐ)の事ねんごろゐ(あやなぎさゆり)ゐ頼みおき杉生ゐもいとまをつげろゐをたちいでたまひけるげ霜ゐかごをよせさせし庭ぐちの門ゐんどゐあやうきまでゐいたうゆげみとびらゐくちてたをれたりゐほうたのゐりさまゐ夜目ゐも志ねて見ゆれどもゐをかくれたる事もおぼゐりけるゐ雪も降やみて日いたゝうさし昇のこりなく見わたさるゝゐわゐれゐさび志うゐれまさり只松の雪のミわたゝゐ寶ゐ降積り山里のこゝちしてひぐらのかどとゐゝようゐるところをころいふべけれ去

年よりふと心づきおのゑげひろゝふミつ心しも姫をわとれとおぼしたゐ義勝公のたましゐのミちびきたまふものゐらんと心のうちゐおもひつゝ樹の木の枝おもげゐ降りつむ雪にうづもれたるを(さゆり)をめしてとらゐせたまへべとらとぬ松もうちやミ顔ゐおのれと一人りおきうへりゐずゐよりさとゐぼるゝ雪もゐゐたつすゐのよつ山げうちよりゐミのこゐぬ日ゐゐきといへるうたごゝろもおもひゐとさきたちゝへりて見たまへでひならねどもわげ袖ゐぬらさじものと(さゆり)ゐとびのきうちふるひてゐゐたりける。光氏やかたへ歸りて後惟吉ゐのたまふやうこゐよりたび〳〵稲舟をおとづきたまへいつとてもよるのミのよひてゐけぬうち忍びてゝへるゐ志ることし今日いたま〳〵(むねきよ)をやりすごさんとおもふゐら日のさしいづるもいとひなくやすらひてたちいでつ東の雨戸をおしひらくゐむゝうゐるゐげ廊下ゐ家根もなくあれたれど日のゐしほとなくさしいきて霜より積りし雪のひかりさだかゐ見きゐゐゐ〳〵にゐとれさまさりておぼもるゐゝ姫を之じめ八〳〵のきぬもふるびてミぐるしくかりゐ姫とのしづきおく鍵ゐづゝりの娘へゐかの虎の皮ゐらぬ純十三本もみ五疋綿までもとり揃へ霜ゐさむさをうちゐげきしふるくよりつゐへたる女どもへゐ袖小袖門を守る翁のためまで思ひやりつゝ上下のほど〳〵をよくわゝちいづゑも〳〵悦こぶべき物をまた送りつゝ之し人ゐつゝゑて稲舟のうしろミゐしてとごくまんと心を誌そをろれと志らぬ二葉の上のゝしづきなんどゐ又例のわゐぎミのうちとけわざを志たまふとひう〳〵ゝたりゐひたりゝり。切ねの一ト間ゐ光氏ゐのどゝゐ詠めてゐるところへ紫をすま世置たる西のちんより言の葉まゐきりゝまゐもとよりうひぶしを志たる中ゐゐゐらざれど鞍馬山よりものいひなきゐしもとの女よりも心安きこゝらして召仕ひゐぞきたまひつ此頃ゐとゐわけて男の髪を結おぼえろきらの事ゐて光氏のよぺざるときもをり〳〵ゐ御前へい

でしかばあなたゐも心をおろすゐあたもさまでむゝから
ず近くよりて手をつゝへをのしき事のむんべるを申シわ
げぬもいのゝゐれど又きゐえんもむづゝしトはゐゑをて
いひやらねば「ゐきいゝなる事にゝわらん三筋町にあ
りしときいひかむしたる男よりせひにゐあたへ來たれよ
と人わみとづけいひよりたるやわれにいつゐむ事あらじ
言ゝけてことばをてめむぢらうもとしによをいづを仇め
く事ゐるをさあらぬ顔のにくさよトいてれて言の葉さし
うつぶき「わが身の事にむんべらばおさげすみわろばす
までも申シわげもいたしませうが是いろれふいひきのへ
てトゐを打笑ひて稲舟さまよりあゐたさまへのおんふを
トふとゐろよりとりいでたり「さまでゐれいとりのくす
ものにもわらぬを事ありさうに云たるいかへつておゝし
トうちひらいて見たまふにみちのくわてやすきたりけん
紙のむだへも美しのらず厚くてえて白からぬふちんのう
丁子のたぐひゐらんもゐしのちざる句ひをたきしめゝの

みむじ〳〵しきつやゐき手にてやう〳〵ふゝきおはせたれ
ば發句も又ろをふついで（ゐらゐろもつら〳〵ときをが
きぬたゐゐ）「アラゐゝろえざる發句ゐりとうちゐたぶき
たまひけをば言の葉い妹の小紫ふもたせきたりしいとお
もきふくさづゝみをとりいださせ御前ふさしおくを光氏
やがてひらき見るゐ今い世ふ用ひざるころも箱といふも
のゐりからごろもとい此事ゐらんと一人ゐみしてゐたま
へば言の葉いゐをひうめ「紫さまへ（あやなぎ）よりお
ん手遊のたぐひの物をたび〳〵にまゐらすれど私しいま
だ（あやゐぎ）ふいちどもゐひたる事いゐし其禮がてら稲
舟様へおめ見ゐも願ひたく昨日たゝすの御屋へむじめて
あがりむんべりしが興のさめたる事といふいまづ姫君の
御前へいでおんゐりさまを見わぐるゐ扇をひたゐにゐざ
させたまひし其むづれよりこぼれいでし髪のゝゝりの美
しきふひきりへておゝ鼻のいろづきたるい見るもうたて
く夢かと思ひておんつゝへすべりいづれば其おふをと此

箱をなゝにおきおてしもとがとりのゐをふれをどうして
わのぎをへわげられるものいゐと（くれゐゐ）とかい
ふわゝきをゐごが顔をわゝめて打笑へむされむとて光氏
ぎをのおんよろはひふと姫君がわざ〳〵とおとりよせ此
儘ふすておゝむお心ざしもむなしゝらんと（あやゐゐ）が
いふてゐれど其おつゐのひふい私がといふものもゐく忘り
おをばかり（さゆりが）ふつと心つき此頃までいひどつふ
すみをたしいゐかの言の葉どのゐゐふゐるのいよいつい
で歸りたまふ其時ふとゐとづけられてせんゝたゐうもつ
て參い參りゐがら稲舟様へいひとかたゐちずきをのごふ
びんのけたまふと世のういさといおはきゐ違ひ三筋町の
つぼねふもゐんゐのいゐいおん顔ばやつゝちゐらねど此
箱も見ゝけよりい重さ〳〵化物が出ようもをれぬをゐの
ものがゆづりわひおつかひをいやがつたいなんず譚のゐ
る事とろれもゐおんめにのけぬうちをゝしき事のむんべ
ると申シたに違ひゐくおふををお讀ゐろむそと何ゝにて

〳〵お一人り笑少しお見せゐろむしませトさしのゐけむ
光氏いわざとわがみをゝゐた事「一人りまろねの夜毎よ
おとぬれたる袖をまきはさん人もなき身を此如くとむる
ゐ事のうれしさよ此儘ふしてすておゝば姫もゐゐしくお
もむんふよくゐ言の葉もてきたるさりゐがらくりのへし
ゐんずればぎんずるほどわらわさましの發句やゐわきを
てものも云がたしくたなしいろのむぢもみぢとものゐげ
ふてゐたへしい（あやゐぎ）がとりゐしゐらんが此からゐ
ろもい姫のており筆も字ぶとにゐむじ〳〵しさむいへおの
れが心ふいゐれをきぬたにうちやいちげ心をつくして去
たてしものをまことにたまのゐとのはといゐれをゐういい
ふべけれ去頃ひとたびおてせしふミい筆去りを（くれゐ
ゐ）がもちろへてやゐゐせゐんゐれよりいよかりしトは
ゐゐをてきたまひつ彼箱をうちひらけばきぬのつやゐう
古めきて二百年ばかりまへの世ふはやりたるもひきば小
紋とりかけてゐまかゐるをくろ紅に染なして鹿の角の五

すべりの大きさの紋につけたる羽織なりわさましとうたへふゐげやりかのふミをひろげながら手習ふやうゐ其はしへりいつくるを言の葉がかたいちよりうち見れば（むねきよ）ふのりて（袖ゐふれておもへべくやし紅の花いろてきむゐと見しかども）と書よごしたまひけり言の葉い其故をよくもゑらねどこの鼻のとがめゐらんと心におゐしくゐげやりたまひし羽織をとつてつくゞとうち詠め包のうちをひらうねべいかゐる品かゑらざれどうるものをわかきミのおんめにふれしいわきまでも心ゐしとやおぼさんのといとむづゐのしく人ゞのまゐるに驚きとりかくしかくわさましくふりたるきぬを送りたまひし姫君のおん心ねのいぶゐしさよとうちかすめつゝ小壁に云御前をたゝんとゐしけれべわれも事ゐうちまぎれ昨日よりして紫のもとを一度もおとづれずいざもろともにかんとて言の葉をひきつれつやゞて西のちんへおもむき紫のていを見るにまもあざやゐゐ額をつくり顔いと白くうのあたりそゐし紅の色をふくむいこの稲舟ゞ鼻のあのくゐはゞしきにゝひきうへてまだゐたおひのおとゐとい見えねどゐでゐ美しうゐをとしたちてかねをつゝゐたさてろとおもひやる口もとのいとゐひらしくとめきい梅ゞ香をちらす縫の櫻もゐよやゝにふりのたもとへ枝たをて柳のてしゐきなしゝいてしゝゐといふをつの願ひもさゐゞら揃ふおもひしつ心ぐるしき事どもゝゐをゐゞすてしわすれける言の葉い小弁をよび御鏡臺のらくしげをだれ箱などとりよやさや光氏のおんうしろへたちまれべふりのへり「髪い昨日もうたゝべ今日いおくれをゝきゐげてゐでつけておくべしトのたまふをゐゝろえておんびんぐきの志ゞけゐきをつくろいゐどするのたもちゐ紫い例の如く離ゐろびゐよねんゐく画ゐどのきていろどるゐゞ見きもともゐと光氏もすりよりて筆をとりやたけいたのくやかたる女のすゞた画をかきなして鼻のところゐ紅をつけうちおきて見たまふゐゑにゝきてさへをかしげゐゐうのゐたりそゐし紅の色をふくむいこの稲舟ゞ鼻のあのくゐはゞしきにゝひきうへてまだゐたおひのおとゐとい見えねどゐでゐ美しうゐをとしたちてかねをつゝゐたさてろとおもひやる口もとのいとゐひらしくとめきい梅ゞ香をちらす縫の櫻もゐよやゝにふりのたもとへ枝たをて柳のてしゐきなしゝいてしゝゐといふをつの願ひもさゐゞら揃ふおもひしつ心ぐるしき事どもゝゐをゐゞすてしわすれける言の葉い小弁をよび御鏡臺のらくしげをだれ箱などとりよやさや光氏のおんうしろへたちまれべふりのへり「髪い昨日もうたゝべ今日いおくれをゝきゐげてゐでつけておくべしトのたまふをゐゝろえておんびんぐきの志ゞけゐきをつくろいゐどするのたもちゐ紫い例の如く離ゐろびゐよねんゐく画ゐどのきていろどるゐゞ見きもともゐと光氏もすりよりて筆をとりやたけいたのくやかたる女のすゞた画をかきなして鼻のところゐ紅をつけうちおきて見たまふゐゑにゝきてさへをかしげゐゐべ一人り心ゐはゝゑまれおのれゞかげの鏡臺にうつれるゐふとめをとゝゝ手づゐら鼻をゐゐくゐめ稲舟にくらべゐべゐをもすゐしいよき顔ゐらんゐれだゐものく鼻のさきをにゐゐしたるい見ぐるしきをましていろいゐをじろくゐゞきおもてひろき額ゑたしく見るより（むねきよ）ゞ興をさましてゝへりしもゐと見りゐりとおもひつゝつくゞとゐゞむきべ言の葉彼姫君の姿をゑゞき鼻をゐめおんたゐむきに其まゐひをせさせたまふと心いつけぞうちいだしていいひゞたくをゝしさゐらへ袖をもて口をおゐひてものいずゐ紫い其故をゑらねべうしろゐのびわゞり鏡にうつる光氏の顔をつらくさしのゞき「何のまねをゝゑたまふトゐゑうちわげて笑ひけゐべ光氏いゐゐたを見ゝへり「もしろれゞしゞ此様ゐかたゐふゐらべいのゐらんトとゐせたまふゐ紫まもをひろめてといきをつき「ろれゐろゝゐしくゐんべらめもしゑみついておちぬとゐるいろんゐ事いよしゐゑてトわやうく思ふけしきゐれべ

光氏わざと紙をもておちぬはどふおしぬぐひ「いろふもうあたの云とはりもとのやうにゝ白くあらぬえきあき事をなしてけり室町の父ぎとゐ何と言譯なすべきと眞しやのふ云けれゞ紫ゝいとほしき事とおもひ振袖へびん水いれの水をつけたちよりておし拭へゞ光氏ゝふつてとゑを「むのし平仲といひし者あくまねをして女に見せんと硯水をつけたるを女げろれと心づきろつと墨をすりたるを去らずにあをも目へすりつけ顔を黒く染たるゝ墨ぬりといふ狂言にまゐびて今もする事あり其やうにおし拭ひあを〳〵紅をちらもまいあのきものゝわやかるとあとわざにもいふあきゞわが顔うちをくをなゐゐ染なす時ゝ平仲げ墨ゐもまして見ぐるしトたゞむれたまふを言の葉ゝをうしきいもせのおんゐうとおもひゐしつゝたちわげり「今日ゝ空もゞをたるにうくたてゐめておゞしゐゞおん心もむすぼれゐんトやをら障子をおしあくれゞ日ゝうらゝうに風もたえいつしゝ花ゝ咲いでんと　（以下次號）

社告

修紫田舍源氏の原本ゝ古人歌川豐國子ゲ江戸紫の筆の艶色に色ある挿畫わて文ゝ讀ずに一目見て其意を解し得る程な先師有名の方幾子ゲ以ひ二版の外ゝ入ちの一版差加へよとの肝腎の文章ゲ又しして工夫を凝へ風に先本篇より改の電覽に備へ扨後（即ち五厘）初音じます

假名の根ゲ正ゐ篇（上）御注れぬ○げん先師

後篇六十定但

明同

東京圖書館

和書門	小說類	函	別四架	一〇七號	二六冊

編輯出版人　守屋喜代吉

發兌元　東京南鍋町壹丁目　ちさきや誠
横濱辨天通四丁目　守屋正造

一十六錢二十部仝
郵便稅申受候
定價三錢五厘
丁目七十番地

ご候迄從前の通り